

# 「身じまい」のおと



滝野隆浩

社会部編集委員

◎若林健次

葬送界のアジア国際会議・見本市がマカオであって、聖徳大学の長江隆子教授(61)は5月上旬、パネリストとして発表してきたという。「お土産に」と言

ってくれるわけがなく、見せられたのが、黄色い表紙のおしゃれなカタログ。148ページにわたって二戸建ての庭付きの邸宅やプール、ゆったりバスルーム、機能的なキッチンが……すべて紙でできた小さな「家」の写真だった。これらミニチュアハウスを、中国では葬儀のときに燃やすという。あの世で困らないように、いい暮らしができますように、と。そのためのカタログだった。

さらに、以前、台湾で買ったという「札束」がテーブルにどろんどろんと置かれる。「紙銭」などと呼ばれる葬儀用札束。むこう側に行ってもおカネは必要なのだ。紙製のバンズも燃やされるというから、ぜひ見てみたい。同じアジアの隣の国といっても、亡くなった人の送り方は違う。中国ではあの世もこの世も地続きで、金銭感覚や欲しいものは同じというところなのか。

欧州、米国をまわってきた、本コラムの「世界お墓をめぐる旅」。最後はやはり、中国の葬送事情を知りたい。そういえば、春先、「北京市が市民に、遺灰は海にまぐさう奨励している」

## 墓地不足の中国で進む「葬送革命」

という記事を読んだ。なぜなのか。同僚特派員は背景について「多くの中国人は「先祖のそばに埋葬されたい」と思っているが、市内の墓地確保が難しいため」と書いていた。墓地不足はどこも同じか。さらに興味がわいてきた。

思い出したのが、以前、取材した東京電機大の八木澤壯一・名誉教授(66)。火葬場設計の国内第一人者は、確か1980年から、中国の技術者と交流を持っていると聞いていた。今回さらに聞いたところによると、その後も交流は続き、89年から1年間の滞在では、中国全土4万キロの旅をして、各地の「殯儀館」を見て回った。殯儀館とは火葬場と葬儀場、納骨堂を合わせたような総合施設のこと。40歳からNHKラジオ講座などで始めたばかりの中国語を引っかけ、通訳なしで回ったというから恐れ入る。この探究心というか、徹底した現場主義はなんなのだろう。

さて、中国では、もともと日本と同じように土葬だった。それは数千年続いていた。ところが、中華人民共和国政府ができた後の1950年代以降、毛沢東・初代主席は封建的な風習の改革に乗り出し、その一環として、「殯葬革命」を行ったという。「革命」の文字がつくところが、中国っぽい。

背景には北京など都市部の土地不足があったらしい。八木澤先生によると、「殯葬革命」は①火葬の推奨②木のひつぎをやめて遺体を赤旗でくるむ方式に変える③墓地をやめて納骨堂方式へ――の3点で進められたという。党の方針は決まった。しかし、そのまま通らないところが人間の営みなのだ。